Katherine Mansfield : "A Cup of Tea"

— Narcissism and Love —

桜　井　成　昌

はしがき

創作活動を通じて人生における意義の何たるかを真摯に探究していくタイプの作家たちにとって，彼等が最終的に行き着くところは一体何なのであろうか.

この問いに対して，イギリスの女流作家 Katherine Mansfield(1888～1923)について考えてみた場合，それは 'Truth' 乃至は 'Honesty' というものであった．周知のように作家生活の大半を絶え間ない病の苦しみの中で過ごし，34歳という若年で亡くなった Mansfield は，彼女の最も充実した創作期（1920～1922）において，はっきり自身の死期の近いことを意識しながらも，己を浄化し，ひたすら物事の真実のみを作品に投入していくことに全力を傾けた．そしてそれは，'clistal clear'（水晶のように透明に）という心からの願いとなって絶えず神に祈られた.

1921年10月の日記[(1)]の中で Mansfield は次のように語っている.

One must learn, one must practise, to *forget onself*. I can't tell the truth about Aunt Anne unless I am free to enter into her life without selfconsciousness.

人は我を忘れてしまうことを身につけ，常に実行しなければならない．私がアンおばさんについての真実を語ろうとする時，もし私が自意識というものを捨てて彼女の人生に自由に入り込んでいけないのなら，それは不可能である．

To forget oneself，これは経験の作家と言われる Mansfield が，自分の人生を正直に生きて，彼女が見聞きした真実を正しく作品に伝えていく上で，どうしても持たねばならぬものであった．これに類した言葉は，*efface oneself*, *give up self* というような形でその頃の Mansfield の書簡や日記に見ることが出来る．そしてこれは，見方を少し変えるならば，narcissism を捨てるということにそのまま通じているのである．心の浄化の妨げとしかならぬつまらぬ pride，必要以上の自意識，こうしたものを一切捨て去らない限り，決して曇りのない真実の作品を書くことが出来ないことを Mansfield は認識したのである．

Mansfield の所謂傑作と言われる作品群は，その殆んど全てが1920～1922年の間に書かれている．即ち，彼女の死ぬ前三年位の間に凝縮的に書かれたわけである．本稿で取り上げる "A Cup of Tea" もそうした作品群の中の一編で，Mansfield の作品としては比較的知られたものである．この作品は Mansfield が，持病となった肺結核の病状が思わしくない時期に，医者の治療費を稼ぐために書いたもの[(2)]で，この中で Mansfield はあくまで自分の眼を第三者的な位置に置きながら，一人の裕福で我儘な女主人公を通じて人間の narcissism 及び egoism というものを真正面から扱っている．

Mansfield の作品と生涯が二分出来ぬものであることは，Mansfield 自身もはっきりと述べているが，このことを我々は彼女の作品を深く味わおうとする時，常に思い起こす必要があろう．

"A Cup of Tea" の場合，この作品が書かれたのは1922年の１月であるが，

ここで扱われている人間の narcissism や egoism についても，上述の1921年10月の日記などを参考に読み合わせてみると，その頃の Mansfield の心境から作者の訴えんとするところがかなり理解出来るように思われるのである．

それでは，"A Cup of Tea" のストーリーを少しずつくだきながら，重要と思われる部分を逐次取り上げ，考えてゆきたいと思う．

この作品の主人公は，Rosemary という一人の小さな息子を持った若い夫人である．Mansfield の作品に関してはその非プロット性がしばしば云々されるが，この作品についても取り立てて言う程の筋はない．溺愛に近く夫に愛され，生活面では殆んど何不自由のない Rosemary が，他人と接した時に見せる様々な態度や心の動きがこの作品の全体としてのストーリーを形作っている．まず書き出しを見てみると，いきなりこの作品は次のように始まっている．

Rosemary Fell was not exactly beautiful. No, you couldn't have called her beautiful.

ローズマリー・フェルは正確に言って美人ではなかった．そう，誰だって彼女のことを美人だなんて呼べやしないだろう．

ここはまだ作者の Mansfield による Rosemary についての語りの一部である．しかし，小説の書き出しと結びが多くの場合作者の腕の見せどころと言われるように，ここでも我々はこの書き出しの部分を不注意に読み流すことは出来ない．というのは，このたった二行程の言葉がこの作品の中で果たしている役割が，殊のほか大きいからである．それについては最後に纏めて述べることとして，このまま話を進めてゆくことにしたい．

免に角，Rosemary Fell は第三者的に見て美人と言える女性ではなかった．しかし裕福で自己中心的な彼女にはどうしてもそれを認めることが出来ない．結婚して二年，可愛い男の子に恵まれ，夫からも深く愛されている彼女は殆んど自分の思いのままの生活を楽しんでいるようだ．

作者の Mansfield は Rosemary を巧みに可愛らしく仕立てあげているが，これは Mansfield が Rosemary のような女性をごく世間的でどこにでも見かけられる女性像の一つとして自然に描こうとしているからであって，そのために我々はこの作品のポイントを曲解せぬよう注意する必要がある．Mansfield はこうした存在を実際として認めはしていても，決してそれをそのまま受け入れてはいないのだ．初めの作者による語りの部分で大体 Rosemary という女性の人間としての輪郭はつかめるが，続く展開部からははっきりと narcissist としての彼女の姿が描き出されてゆく．

場面は，ある冬の午後．Curzon Street のとある小さな骨董屋の中である．ここは Rosemary がよく足を運ぶ所のようだ．今日の彼女は店の主人に高価なエナメルの小箱を見せられて，それを手に取って眺めながら，絶体これは自分のものにしなければならないと考えている．色々と細工の施された可愛らしい小箱である．しかし実のところ Rosemary の一番の関心は，この箱そのものにあるのではなく，この高価な箱を所有した時の自分の価値なるものに向けられているのだった．それ故彼女は，箱を眺めながらも，それを持っている自分の手の美しさを眺めることを決して忘れない．

Narcissist は，いかなる状況においても自分を忘れることが出来ない．従って彼等は，対象そのものの興味に我を忘れて入り込んでしまうというようなことはなく，常に自分との関連の中で物事を考えようとする．まさしく forget oneself が出来ないのである．

小箱の値段は28ギニーであった．この値は裕福な Rosemary にも少しばかり高すぎた．しかし勿論，特別なお客と常日頃店の主人から思われている

Rosemary には，高すぎるなどと言って自分の威信を傷つけるような真似は出来ない．彼女はただ箱を自分のためにとっておいてくれと主人に頼むと，店を出る．

この店での遣取の際に Rosemary の見せる態度の中に，彼女の narcissist としての姿が明確にあらわされている．自己中心的な narcissist は，何につけ自分が優位な立場にいる時には，殆んど人を省みることをしない．しかし逆に，一旦自分が不利なあるいは屈辱的な立場に置かれると，その損われた威信を取り戻すべく躍起となり，心が激しく動揺したりする．Rosemary にしてみても，あの小箱をその場で買えなかったことは，彼女にとってのいわば屈辱であったのだ．

店を出た Rosemary は，待たせてある自分の車へと向かおうとするが，外の気配はもう打って変わって彼女の心に迫って来る．寒い冬の午後．雨降り．夕の闇も急ぎ足で押し寄せているようだ．悄然と歩く Rosemary の眼には，あたりの家々に点される燈の色ももの悲しく映って見える．そして寒さと淋しさの中で堪なくなった Rosemary は，あの小箱があれば縋付けるのにと一人思う．暫くじっと佇んだ後，漸く家へ帰ってお茶でも啜ろうという気持ちになった丁度その時，いきなり一人の痩せ細った若い娘がどこから来たのか Rosemary の眼の前に現われる．娘は一杯のお茶代を Rosemary に乞う．

ここがこの物語の大きな山場である．

娘が一銭も金を持っていないことを知った Rosemary は，次のように考える．

"How extraordinary!" Rosemary peered through the dusk, and the girl gazed back at her. How more than extraordinary! And suddenly it seemed to Rosemary such an adventure. It was like something out of a novel by Dostoevsky, this meeting in the dusk. Supposing she took the girl home? Supposing she did one of those things she was

always reading about or seeing on the stage, what would happen? It would be thrilling. And she heard herself saying afterwards to the amazement of her friends: "I simply took her home with me,"...

「まあ何ということでしょう！」ローズマリーは薄闇の中からじっと見つめた，すると娘もローズマリーを見つめ返した．こんなことってあるかしら！　と，突然 Rosemary には，それが実にすばらしい出来事のように思えた．こんな夕闇の中での出会いは，ドストエフスキーの小説の中から抜け出て来たもののようだ．この娘を家へ連れて帰ったらどうだろう？いつも小説で読んだり劇で見たりしていることを一つ実際にやってみたら，どんなことになるだろう？　きっとすばらしいにちがいない．そう思うとローズマリーには，後で友達をびっくりさせながら，「私はただこの子を一緒に家へ連れて帰っただけのことよ」と言っている自分の声が聞こえて来るのだった．

不意に現われたこの娘の存在は，Rosemary にとっては彼女の虚栄心を満たすための格好の材料であった．たった今まで沈んでいた Rosemary の心は，新たな期待に踊り出す．

Narcissist はしばしば自分の偽善にも気付くことがない．いやそれどころか当の本人は，時にそれを善意と思い込んだりしている．そうした微妙な心理を Mansfield は，この数行の Rosemary の心中の描写を通じて巧みに表わしている．

Rosemary は確かにこの娘を助けてやろうと思った．しかし勿論彼女は，この娘に対する本当の同情心を起こしたわけではない．ここでも Rosemary の最大の関心は，この可哀想な娘を助けてやった自分を他人がどう見るだろうかということに向けられているのだった．哀れな人間に対して本当の慈悲心を持

った時，一体人はそれに絡めて自分の利益などを考えたりするものだろうか．だが，narcissist の Rosemary にはそんな常識は望めない．今，彼女の頭の中にあるのは，何かの小説かどこかの劇場でヒロインを演じている美しい自分の姿なのだ．

Rosemary は娘に向かって家へお茶を飲みにいらっしゃいと言う，当然驚いて尻込みする娘に対して彼女は手を差し出し，「本気よ」と言って，微笑んでみせる．しかしこの時も Rosemary は，その自分の笑いが何と気取り気がなくてやさしいんだろうと一人感じ入るのだ．

彼女の心の眼は一時たりとも自分から離れることがない．主役はいかなる場合においても自分なのである．一旦こうしたいと考えた瞬間，narcissist の頭の中からは，既に他人は実質的に締め出されているのだ．親切をするにしても，それが自分にとってどのような関わりを持って来るかを絶えず考えているので，そこには純粋な意味での人と人との心の通い合いなどというものはない．

結局 Rosemary は，自分のために娘を家へ連れて帰る．そして彼女自身の部屋の中で Rosemary の親切が始まるのであるが，親切を施そうとする自分自身に酔ってしまっているので，娘の本当の気持ちがつかめず，彼女自身自分のしていることに少々手を焼いてしまう．実は，家へ連れて来られた時から娘には，この家の何もかもが眩しすぎたのだ．ちょうど籠の鳥と空の鳥，池の鯉と川の鯉といったところだろう．しかし，たとえ Rosemary にとってはほんの気紛れから出た思い付きにせよ，娘の方では真剣そのものだったのだ．彼女の体は本当に一杯のお茶を要求していたのだ．やがて娘はそれに気付かぬ Rosemary に堪兼ねて，もしこれ以上何も口にしなかったら自分は気を失ってしまうと語る．これに対し Rosemary は，すぐさまお茶とブランディを持って来るよう女中に命ずるが，それを聞いた娘は自分が欲しいのは一杯のお茶なのだと言って泣き出してしまう．

この場面は，読む者に娘の切羽詰った気持ちを非常によく伝えて来る．しか

もこの突然の事態に及んで，Rosemary が言葉では表現出来ぬ程感動する様が次に描かれているが，その感動がこのような状況に置かれた Rosemary 自身に対するものであることは容易に読み取れる．

感きわまった娘が，もうこれ以上こんな生活が続くのなら死んでしまいたいと言った時，Rosemary は自分が何とかしてやろうと約束する．しかし勿論，発作的に起こした行動故に Rosemary に具体的なあてなどないのだ．

さて，こうして次々と表わされる Rosemary の narcissism は，最後に夫 Philip の登場をむかえて，その最も醜い部分が曝出されてゆく．

Rosemary の家に連れて来られてからずっと硬くなっていた娘は，ささやかな食事の後いくらか寛ぎを見せ始める．そこで，ここぞと思った Rosemary が，自分の一番知りたかったことを娘に聞いた時，丁度ドアの把手が回って夫の Philip が入って来る．娘を見て驚いた Philip は，Rosemary を書斎に呼んでことの次第を説明させる．道理にかなった説明が Rosemary に出来る筈がない．彼女は全く衝動的に娘を連れて来たのだ．それも，その娘を本当に哀れだと思ったからではなく，自分自身に何がしかの利益があると思ったからこそそうしたのだった．その事は，書斎で Philip から受ける思いがけない言葉に対して，残酷にも Rosemary が娘にみせる態度の変化に証明されている．

訳のわからぬ説明を聞かされた Philip は，Rosemary に向かってあの娘はものすごく綺麗だと言ったのだ．この言葉は narcissist の Rosemary には当然のことながらひどくこたえた．書斎を一人で出た Rosemary は，嫉妬心を持って Philip の言葉を噛締めながら，自分の書き物部屋に行き，引出しから数枚の紙幣を取り出す．

ここにいたって Rosemary の身勝手さが，きわめて醜く露骨に表わされている．不利な形勢に置かれて心が動揺した彼女は，娘に金を握らせて追い返してしまうという態度に出たのである．もともと Rosemary には娘の気持ちなどどうでもよかったのである．娘にしてみれば彼女が路上で Rosemary に話

しかけた時にその場でお茶代を恵んでもらった方がどんなにか有難かったかもしれない．しかし Rosemary は，自ら渋る娘を半ば強引に自分の家へ連れて来たのだ．そして今度は，やっと寛ぎかけたその娘を自分の領分を守るために何の躊いもなく追い返したのである．自分の益になると考えたからこそ連れて来た娘が，ましてや害にともなれば，もう Rosemary には用はなかったのである．

30分後，書斎に戻った Rosemary は，Philip に娘が帰ったことを告げる．それから彼女はやおら Philip の膝の上に座わると，彼に甘え始める．

この場面から結びにかけての Mansfield の筆運びは実に見事である．Rosemary の女としての可愛らしさを充分に描いてみせながら，同時に彼女の narcissist としての醜さも最大限に描き出している．

すっかり化粧をし直し装身具もつけた Rosemary は，甘ったるく Philip に言う，「私のこと好き？」勿論 Philip の答えは決まっている．Philip の気持ちを再び独占出来た Rosemary は，例の小箱のことを彼に話し，買ってもよいという許しを得る．しかしもうこの時には，Rosemary にとって小箱のことなどはそれ程重要ではなくなっていたのだ．骨董屋を出た時にはあれ程彼女の心を占めていたこの高価な小箱のことも，Philip の娘に対する思いもよらぬ言葉を耳にした途端に，たちまちついでのことになってしまったのだ．そしてこの物語は，彼女が本当に言いたかったことを Philip に語るところで終わっている．

"Philip," she whispered, and she pressed his head against her bosom, "am I *pretty?*"

「フィリップ，」と彼女はささやいた，そして彼の頭を自分の胸に押しつけて言った，「私って綺麗？」

物語はこれで終わりだが，この最後に Rosemary 自身の口から語られる結びの言葉に我々はよく注意をする必要がある．というのはこの言葉が，この作品のテーマの上にも，又作品全体の構成の上にも，非常に大きな効果をあらわしているからである．ここで書き出しの言葉をもう一度思い起こしてみたい．

Rosemary Fell was not exacty beautiful. No, you couldn't have called her beautiful.

ローズマリー・フェルは正確に言って美人ではなかった．そう，誰だって彼女のことを美人だなんて呼べやしないだろう．

こうしてあらためて見てみると，明らかにこの作品は，書き出しの言葉と結びの言葉とが巧みに呼応していることがわかる．これは恐らく作者の意図的なものであろう．書き出しでまずきっぱりと Rosemary の容貌に関する断わり書きをした Mansfield は，結びではその主人公自身の口から「私って綺麗？」という言葉を言わせたわけである．この二つの言葉の関連の中にはこの作品のテーマを理解するためのポイントが潜んでいると言っても過言ではあるまい．自分のことのみを考えて自ら行なった行為の成り行きに度あるごとに一喜一憂する Rosemary の滑稽な姿を通じて，作者の Mansfield は，人間のどうしようもない narcisism や egoism を克服しない限り，いつまでも人は他人の眼に左右されて心の安らぎを得られず，物事の真実の姿をつかむことも，人に無償の愛を施すことも出来ないということを訴えたかったのであろう．*Love, Truth, Honesty* は Mansfield の人生における最大の関心事であった．しかし，これらに nasrcissism が介在した時，最早そこには実質的な価値が全く失われてしまうことを Mansfield は承知していたのだ．Rosemary の打算的で心不在の親切は，結局娘の心を傷つけるだけのことにしかならなかったろう．

しかし，Rosemary にしても自らその narcissism に気付き，それを克服してゆく勇気を持たぬ限り，真の意味で人を愛することも又夫をも愛することも出来ず，結局は自分自身の心を自ら益々傷つけてゆくことになるのである．

このように，小編ではあるが "A Cup of Tea" には，人の心のあり方を考えさせる要素が多分に含まれていることがわかる．

時に，Mansfield は，彼女の日記によるとこの作品を 4, 5 時間で書き上げたという[3]．けだしそれには，この作品で扱うテーマがこの時の Mansfield の心境からは非常に扱い易いものであったからに違いない．勿論生活面での経済的な事情もこの時にはあった．しかし，創作時間の長短や生活面での種々の事情が，作品の内容の優劣に直接関係してくると考えるのは早計であろう．要は，作品を手がける時の作者の motive の問題なのだ．

ここで少し Mansfield の生涯を振り返ってみると，1908年に 2 度目の渡英をして以来，Mansfield の生活には波風の立たぬ穏やかな期間というものは殆んどなかったと言ってよい．London に舞い戻った喜びも束の間，20歳そこそこの彼女がそれから一年あまりのうちに味わったものは，失恋[4]，結婚の失敗[5]，流産[6]といった苦い経験ばかりであった．Mansfield の生涯苦しむ連続的な病のきっかけもこの頃から始まり，やがてそれは肺結核といった宿痾につながってゆくのである．感受性の強い Mansfield は，つかみどころのない人生にいらだち，辛辣な眼を人に向け始める．そしてこうした初期の苦い人生経験は，シニカルなものとなって Mansfield の最初の短編集 *In a German Pension* (1911) に反映されている．第一短編集の出版後間もなく，後の夫となるオックスフォード大学生で若き批評家 John Middleton Murry (1889-1957) と知り合い，やがて夫婦同然の形で生活を共にし[7]，互いの刺激の中で文筆活動を進めてゆくのだが，そんな Mansfield に1915年10月，大きな事件が起きる．第一次大戦でイギリス軍隊に従軍していた彼女の最愛の弟 Leslie Beauchamp が，まだ実戦に参加しないうちに手に持った手投げ弾の爆発により突然の事故死を

遂げたのである．このショックで一時は死のうとまで思いつめた Mansfield は，やがて意を決し，後の自分の人生を自分と弟の幼年時代の思い出が宿る故国ニュージーランドを素材にした作品を精一杯書くことによって過ごそうと考える．実際，これを機に Mansfield の創作活動は大きな転換期を迎え，以後彼女は自分自身のスタイルを持つようになったと言われる．しかし，同時にこの時に肉親の死を身を持って体験した Mansfield の心に人間に対する強い愛が芽生え始めるのである[(8)]．1918年に最初の喀血，いよいよ病との本格的な闘いが始まるが，これにより Mansfield は絶えず自分の死を意識し，死により物を書くことが中途で断たれることのみを恐れて，文筆活動を続けて行った．病が重くなれば当然人生に対する見方も真剣になって来る．しかし Mansfield は，決してそれを pessimistic に考えるようなことはなかった．病は Mansfield にとってもう一つの大きな特権となっていたのだ[(9)]．そしてその特権を生かして人生の意義を模索し，その過程で得たものを彼女は作品に反映させていったのだった．*Love, Truth, Honesty* は，そうした Mansfield が彼女の短い生涯の中では最終的に行きついたものと言えるのである．勿論その時には，Mansfield は彼女の最も充実した創作期にあったのである．それ故 Mansfield は，どのような事情があるにせよ，決していい加減な気持ちで作品を手がけるようなことはなかったのである．

さて，Mansfield が "A Cup of Tea" を書いたのは，先に述べたように1922年の1月であるが，これは丁度彼女の死の一年前にあたる．病の進転が最も深刻な時期でもあったが，しかしこの頃の Mansfield には，病の苦しみの中から生の素晴しさ，愛の素晴しさをしっかりと認識した人間としての暖かみのようなものが感じられる．若い頃の Mansfield の気性には，気紛れで自分本位なところが多分に目立ち（勿論これは，その後すっかり直ったわけではない），特に肉親や夫よりも延べて彼女と共に過ごす機会の多かった友人の Ida Baker[(10)] などは，彼女の世話を献身的にしてやりながらも，Mansfield の思うよ

うに振り回されるようなことがしばしばあった[11]が，こうした若い頃の自分自身の姿も経験の作家と言われる Mansfield の頭の中には，"A Cup of Tea" を書くにあたって多少なりとも去来していたかもしれない．そして Rosemary を描く過程において，自分自身に対する反省のようなものがなされていたのかどうかを推測してみるのは非常に興味深いことだが，それは最早私の語れる範囲のものではない．

最後に，Ida Baker の回想記の中から，病の悪化により筆を執ることを中断した時の Mansfield が，それまで自分の書いたものの全てを心の中で清算して語ったと言われる印象的な言葉を紹介して本稿の結びとしたい．

> To be a fine writer, one must learn to *live finely*. One must have a passionate love of life and all that lives and breathes——not only the sunny, beautiful things, but the grim side too : all that makes up Truth.

> 立派な作家になるためには，立派に生きることを学ばなければなりません．人生そして全ての生きて呼吸をするものに対し熱烈な愛情を持たなければなりません．太陽の光を受けた美しいものばかりでなく，ぞっとする程いやな面に対してもです．そうした全てのものが真実を作り上げているからです．

注

(1) J. M. Murry (Edited), *The Journal of Katherine Mansfield*. London : Constable, 1927, p. 269.

(2) この年の2月より Mansfield はロシアの結核の権威 Dr. Manoukhin の治療を受ける．

(3) *The Journal of Katherine Mantfield*. p. 284.

(4) ニュージーランド時代からの知り合いである Trowell 家の双子兄弟の一人

Garnet との恋.

(5) 前年友人の紹介で知り合った10才年上の声楽教師 George Bowden との衝動的な結婚.

(6) これは, Garnet Trowell の子供とみられる. Michael Joseph, *Katherine Mansfield : The Memories of LM.* N. Y. : Taplinger Publishing Company, 1971, pp. 42-50参照.

(7) 正式な結婚は1918年5月3日に成立.

(8) J. M. Murry, *Katherine Mansfield and Other Literary Studies.* London : Constable, 1959, p. 82等参照.

(9) 1920年10月に Mansfield は, Murry への手紙の中でこのことに触れている. J. M. Murry (Edited), *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry.* London : Constable, 1951, p. 566 参照.

(10) 1903年に Mansfield が London の Queen's College に遊学して以来の最大の友人.

(11) Baker 自身はそれを認めようとはしないが, これには Baker のお人好しすぎる性格がはたらいているので, かなりの棒引きをして考える必要がある.

(12) *Katherine Mansfield: The Memories of LM.* p. 234.